

笹川だより

トピックス

朝日町 副町長に郷里の 竹内寿実 総務部長が選任された。



竹内寿実氏(としみつ、58歳、甲子町内会 新松)は、昭和49年に町役場に入り、議会事務局長、税務財政課長、会計管理者などを歴任。

ことし4月から2度目の総務部長を務めていた。



【地域の活性化を目指して】

笹川では右記事(朝日新聞 2010年8月14日)に記載されたように、木曾義仲、巴御前、そして地元豪族・宮崎太郎の研究会が発足しました。

宮崎太郎長康 (生没年 1184/7/10)

史実や物語の世界ではあまり目立たないのですが、伝説の世界では結構重要な役割を担っているようで、出身地の越中宮崎に、義仲が保護した北陸宮が一時宮崎に住んだ、とまでは「平家物語」にも書いてあり、そのために建てたのが宮崎城(城山御所というらしい)。当然その支配者は宮崎党なので、この宮崎太郎や三郎(息子)が金出して…いや築城にあたってと思われ、この人の身内等が宮の世話をしたんだらうな…。

倶利伽羅峠の戦い(1183/05)での【火牛の計】の新言説も?



諏訪神社

木曾義仲が諏訪神社を建立し、北陸宮を守った。との事である。

— これからの研究結果が待たれる。 —

—特集 文化とのふれあい—

自然も文化も ひとつひとつの未来に向かって進化していく

【共生の里 笹川】の自然と文化の流れは、左下の4冊の郷土誌に記載されています。

全長5.98km、流域面積16.4km²の大部分が山地となる笹川は、黒菱山(標高1,043m)に端を発し、40分の1の急勾配で北に流れて笹川渓谷を刻み、浸食した跡は河岸に開かれて水田となった幾段もの段丘に残る。

約170戸の家々は右岸の段丘に集まり、軒を接して上流へと連なっている。

狭い谷間の村は鎌倉時代以来、宮崎城とのかかわり合いで集落を形成し、それぞれ氏神を祭り、一村一家ともいえる共同体的な活動を持続することで、厳しい山村の生活に堪え、静かで美しい自然の緑を守り、文化を育ててきた。と記述されています。

義仲・巴御前で朝日に活気

朝日町とゆかりの深い平安時代の武将木曾義仲の研究を通して、まちおこしを図ろうと、同町は四日夜、住民主体のグループ「木曾義仲・巴と宮崎太郎あそび塾」を立ち上げた。同町笹川のささ郷で発足会があり、同町と入善町、富山市から男女三十六人が参加。義仲にまつわるグループにもあり、坂口弘文町産業課長は「連携して大河ドラマ誘致などの機運を盛り上げていきたい」と抱負を述べた。

住民ら「研究会」発足

地元の郷土史家竹内俊一さんが講演し、義仲の生い立ちや、平氏討伐に加わった同町の豪族宮崎太郎とのかかわりなどを語った。同町には平氏討伐を命じた仁王の第一王子北陸宮が平氏の追及を逃れて居住したとされ、竹内さんは「山に囲まれ守備に適した諏訪神社(同町笹川)で義仲が北陸宮をもてなしたのではないかと研究の一端を開陳した。

「ドラマ誘致機運を」

塾生の一人、同町笹川の主婦竹内直子さん(83)は「地元の人知らない歴史も多く、これを機に郷土の良さを再発見したい」と話した。二万月に一回のペースで開き、座学や現地研修を行う。塾生も随時募集し、参加無料。問い合わせは、同町産業課(電話0765(83)1100)へ。(平井剛)

講師の竹内さん(左)から木曾義仲について学ぶ学生たち。朝日町笹川で。

【村を開いた人々】

(郷土誌 笹川史稿、宮崎村の歴史と生活より)

笹川は、他の多くの村々の場合と同様、村が開かれた当時のことについては何等文献史料を残していない。したがってその年代も全く不明であるが、ただ村には開拓者についての若干の口碑を残している。

来任

それによれば、昔「亮(すけ)」「左衛門」の二人がこの土地を開いて居住したというのである。そして彼等は各々の土地の領有を定めたのであるが、その境界を「仕切が谷」と名付け、かつその永住を祈念して地躍をした土地を「地躍」と名付けた。

その地名が今日ではなまって、前者は「シギヤラ谷」後者は「ジョード」と称している。

亮は仕切が谷の北に住み、佐衛門はその南に住んだという。

彼等の先任地については、佐衛門が住んだ所を「佐渡ヶ谷」と名付けているところより、佐渡から渡来したものであろうか。亮については全く不明である。



五輪塔(竹内家)

地神(長井家)

その後、第三番目に三郎左衛門、四番目に与兵衛、五番目に五郎右衛門、六番目に六郎兵衛、七番目に七左衛門が来任したという。

三郎左衛門以下の来任の順序はその名にあらわれているというのである。

真偽の程は確証を得ないが、この七家は江戸時代を通じて一般の住民と異なる、特別の取扱を受けていた。

即ちこの七家は「七人の同苗」と称されて村人の尊敬を受け、かつ一家ごとに年米七升宛を村より納めていた。これは先任権ともみられるべき一種の特権であって、その家名が売買の対象になっていたというから、この七家が村の開拓者であるとする口碑は真実に近いものを伝えていると思われるのである。

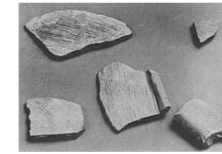
村の起源は、室町時代? 平安末期?

要するにこの七氏が村の開拓者か、或はそれに近い頃この村に移住してきたもので、少くとも江戸時代を通じてその様に村人達の間信ぜられていたことは事実である。それゆえその前任地及び家名の由来等については確証はないが、既に江戸時代よりこのような姓を称してしていたことは興味ある事実である。

この考えに従えば、笹川村を開いた七氏の来任は、戦国時代より江戸時代初期に推定し得るのであるが、

この説に対しては有力な反証がある。それは同村地内より発見された石器・土器・及び五輪塔・懸仏等の遺物である。

石器・土器については字道満より多数の縄紋式土器と石斧等の石器が発見されているし、宇加順坊より祝部式土器が発見されているが、これを現在の村の起源と直接に結びつけることはあるいは無理かもしれない。



(縄文土器



祝部土器)

しかし字田中にある三基の五輪塔、字尻井にある五輪塔・陽刻板五輪、及び板碑類似の碑、字淵尻にある陰刻板五輪等は多分開拓当時の村と関係のあるものと推定される。



しかしながらその五輪等の年代はいずれも年月等を刻印していないので正確には不明であるが、その様式より判断するといずれも室町時代を下らないものと思われるのである。

すなわち五輪は下より地水火風空を象徴するものとされているが、そのうち水輪が球に近いものが鎌倉時代の特徴を示し、室町時代になるとそれが鉄碗型のものが多いこと、またその火輪は室町時代のものが多いのであるが、笹川のものは勾配の急なものが多いのであるが、笹川のものは四基の五輪・二基の板五輪がいずれもこの室町時代の特徴をよく示しているのである。

また、正覚寺の由緒に最禪坊という禅院のあったことを伝え、現在もその跡地の字に最禪なる地名が残っており、かつてこの地より最禪と刻印した瓦を発掘したといい、また加順坊・二ヶ堂などの地名が残っていることは、このような寺院・堂宇等が少くとも江戸時代以前に存在していたことを示すものである。

江戸時代の史料には既にこれらの寺院堂宇は出てこないから、これらは江戸時代以前に廃絶したことを示すものである。このような寺院堂宇が存在していたことは既に村が始まっていたことを示すものであろう。

【秋祭り】

今年の秋祭りは、
8月27日に前夜祭、
28日に獅子舞と昨年復活した盆踊り、
29日に炭焼き体験が催されました。
昨年にも増して盛大な秋祭りとなりました。

東京笹川会からは、10名参加しました。
宿泊は、【共生の里 ささ郷】施設を利用。
(2泊:2000円)
食事は、郷里の皆さんが準備してくださいました。ありがとうございました。



8月27日(金)
前夜祭 余興・カラオケ(共生の里 ささ郷 講堂)

8月28日(土)
獅子舞奉納(各地、神社)
盆踊り(神社)



【ライフ スタイル 炭焼き】

産業としての炭焼き

笹川では昭和40年代初期(推測)まで、地区共有林で炭焼きが行われていました。
共有林の面積は約700町(東京ドーム 約140個分)有り、それを40年で一廻り伐採し炭焼きをする計画でしたので、毎年、約18町(東京ドーム 約3.6個分)を15~20人の炭焼き人を地区内、または近隣の地区から募集して請負の形で炭焼きを行っていました。(参考:笹川の全体面積は、約1,200町、その内、山間部は1,000町あり700町が共有林でした。)
(町→1万平方メートル、東京ドーム面積→約5万平方メートル)



炭焼き人たちは春の訪れとともに山に入り、まず、炭焼きの材料になるブナ、ナラの木などを切り倒し炭焼きの材料を作りました。

お盆ごろには炭焼きの初釜が始まり、山々のあちこちから炭焼きの煙がのぼり、まるで狼煙(のろし)のように見えました。

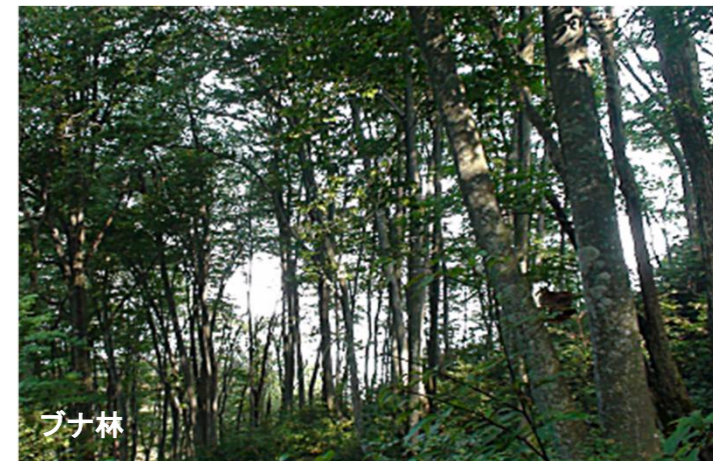
焼きあがった炭は人間が担いで降ろすか、または、炭焼き場所から鉄線を何段か張り巡らし、滑車に炭をぶら下げて道まで一気に降ろしていました。そこからは馬車で村まで運んでいました。



当時は小木のうちに炭の材料として使われた木々は、今日では炭焼きが行われていないためブナ林などとなっていますが、山は生き物です。このように大木になった木々は根が腐り枯れたり、雪、風で倒れたりするモノが出始めています。

自然林は見た目には良くて、古い木々から若い新しい木々に再生させてこそ山が守れると思います。

そう言った意味から、過去の笹川の自然林は炭焼きで守られていたと言っても過言ではありません。



現在は、地域の活性化活動としての炭焼き



今年7月、通称【ほたる公園】内に2号窯が完成しました。

秋祭りの翌日(8月29日)炭焼きクラブ主催の炭焼き体験教室が開かれました。この日の窯だし出荷量は10kg入り24袋で、その日の内に完売となりました。

引き続き、次の黒炭の仕込みに入りました。作業終了後、海鮮BQで、



(^_^)/口☆口\(^_^)

【特産品と山菜】

特産品

笹川では、その時代に於いて一生懸命に土地に適する産業の発展のために努力して来ました。

山田の土手に桑を植えて蚕を飼った時代や、和紙の原料コウゾを植えていた時代、牛や豚を飼って共進会を開いていた時代、そして柿の産地としても永くその名を止めていました。

農業の機械化に対処出来なくなった山田は今は、ほとんど元の原野や杉の植林地と化した。転作田の活用に始まった「みょうが」の栽培が根つき、「笹川みょうが」として品質の良さをなしています。

また、昭和62年に、村おこし事業として設立された、わさび組合のわさびやわさび漬が「笹川の名水わさび」として珍重され、笹川みょうがと共に特産品となっています。



笹川の谷あいには、良質の湧水を利用して栽培されているわさび田が沢山あります。このわさび田は、名勝七重滝にちなんで七段に作ってあります



山菜はいつ頃から食すようになったのでしょうか？

昨今では八百屋さんの店頭で野趣豊かな山菜が並べられることが多くなってきています。でも、そのほとんどは栽培されたモノのようですが、野山に行き自分で採取すれば味もまた格別ではないでしょうか。

【宮崎村の歴史と生活】書によれば、天明3年(1783年)~4年が凶作であったため天明5年の端境期には、食料事情は深刻を極め、新川の村々においても山野草の根や実を採集して食料とした。と書かれています。

天明の飢饉の時にどんなモノを食したかと言うと常食は、

- ゆるこ、たいとう、麦、粟、稗、大角豆、小豆、芋、大根、よもぎ、つちこ、あざみ、うら白の葉
- 季節に応じ、
- 栃のみ、わらび、ぜんまい、ふき、よしな、うど、ひよふ、とらせ、ぎぼうし

現在、笹川で採集出来る山菜(の例)です。



わらび ぜんまい うど



こごみ たけのこ よしな



ふき とらせ

地域の活性化活動は、このほかに
◎ナメコ栽培
◎啓翁(けいおう)桜 栽培 (切り花として出荷)
などが行われています。

【稲作】

急峻な山地が殆んどで平地が少ない笹川は、明治の初めより食料自給の解決策として、山田の開墾に注目し、谷間といわず斜面といわず切り拓き明治32末年頃まで耕地化出来る所はほとんど開墾しつづけたといわれている。

また、それに伴う用水の必要にせまられ、けわしい山岳を切りひらく用水路の開さくに努め、幾多の困難を経て数多くの水路網を作り上げた。最長は西山用水で約6kmもある。そして、完成時には過剰米を売り出すに至ったと言う。



昔の田中地区の棚田風景

近年は、米政策の変化、職業の変化により次第に、山田を作る人も少なく、殆どが植林地として元の山野に戻ってしまい、耕して天に至る棚田の姿も昭和40年代までで終わった。

現在は、機械化が進み、良質の土地と清水の恵みを得て、美味しいお米の収穫が来ています。



田圃のまわりに電気柵を設置し、猪等の動物から稲を守っています。

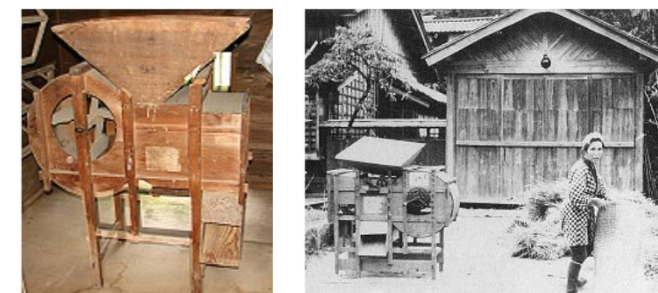


農具

稲作の機械化が進み、現在は殆ど見る事が出来なくなった農具(の例)です。皆様は少なからず目にしたことがあると思いますが。



(馬鍬(まぐわ))



(唐箕(とうみ))



用具名と、
どんなとき使ったか、
思いだして見てください。

【信仰】

正覚寺(しょうかくじ)

城山の宮崎城主だった小塚権太夫が天正年間落城に会い、菩提寺の最禅坊で剃髪して仏門に入り開山し、後に真宗に帰依したと伝えられている真宗大谷派の寺院で、篠溪山正覚寺という。

山門及びめぐりの石垣は城壁を思わせる立派なもので往時の権威を示すものである。

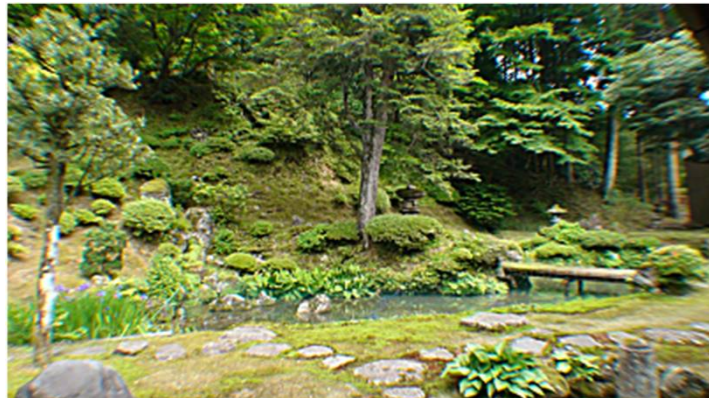
寺院内には城山臼ヶ谷古墓遺跡から出土した殊洲焼の大がめや遺骨等が安置されている。

庫裡裏には自然の地形を利用した庭園があり、江戸時代の茶人殿村洗心の作と言われている。

庭園続きの上部は、老杉の下に続く石段を登りつめると墓地群になっており、そこにある池はモリアオガエルの群生地である。

諏訪山の上部岩場から引いているお寺の水は山岳修験の修験者に、仏の聖水として尊ばれて、水口(みずくち)の水と呼ばれた昔からの名水である。

山門下には正覚寺から分家した小寺と呼んでいる林泉寺がある



「青春」(サムエル・ウルマン著)

青春とは人生の或る期間を言うのではなく心の様相を言うのだ。優れた創造力、逞しき意志、炎ゆる情熱、怯懦を却ける勇猛心、安易を振り捨てる冒険心、こういふ様相を青春というのだ。

【生き生き 友愛会】

友愛会は、満65歳以上の方々の任意加入によるクラブです。

- 活動は、
 - ◇月1回、開催される【いきいき入浴会】
 - ◇7月 ゲートボール大会 (週2回の練習会)
 - ◇3月 1泊旅行
 - ◇日常的なケアネット活動 などがあります。
- 今年は、秋祭り前夜祭の準備や演芸で前夜祭を盛り上げていただきました。(秋祭りの項:前夜祭 参照)



【共生の里 ささ郷】に隣接するゲートボール場



今年3月一泊旅行での演芸披露

【青年団活動 石垣】

昭和30年代の青年団活動では、機関誌【石垣】が発行されていました。

ご存じの通り、笹川は急峻な山地を先人達が開拓して創生された村です。少しでも傾斜をゆるめて広い家敷を作るため土地を削って石垣を築きました。また田圃、畑を広げるためにも同様の手法が使われました。

古くからの石積技術に出稼ぎ工事の経験を加えて【笹川ハドリ】技法が生まれ、【石垣の村 笹川】と言われていた時代もありました。

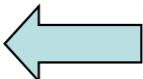
機関誌の名前は、その象徴である【石垣】としました。

先日、開催された秋祭りに参加した忠さん、宏夫さんと小生で、中央町内会を散歩したとき、【いっちゃんいんどん】の誠一さんに出会いました。

誠一さんも長く編集に携わっておいででしたので、もしかして全号(1~9号)持っていらっしゃいますかと尋ねたところ、“持っているよ”と言われ、すぐさま綺麗にファイニング(右の写真)された【石垣】を見せて下さり懐かしく、そして感動しました。(借用してきました。)

当時の青年団活動では、この他に笹川の未来像の提案、婦人会と共同で行った生活改善、旅行、俳句会など沢山の事が行われていました。

青年団活動も、【青春】そのものであったと思っています。



会長の折谷武さんが、第39回富山県老人クラブ大会において、友愛会におけるリーダー活動を評価され表彰されました。

おめでとうございます。

【編者のつぶやき】

この度、笹川だより第4号をお届けしました。

笹川だより4号を【文化とのふれあい】特集としてまとめようと思ったのは【文化】とは何か？と言うことです。

内容がズレないように、自分的に【文化】を定義付けなければと考え、いくつか調べてみました。しかし、異口同音に定義付けすべきモノでは無いと書かれていました。

それでも、自分でもそうだろうな~と思うモノに出会いました。

(その1)

文化にはいくつかの定義が存在するが、総じていうと人間が社会の成員として獲得する振る舞いの複合された総体のことである。

社会組織(年齢別グループ、地域社会、血縁組織などを含む)ごとに固有の文化があるとされ、組織の成員になるということは、その文化を身につける(身体化)ということでもある。

人は同時に複数の組織に所属することが可能であり、異なる組織に共通する文化が存在することもある。

(その2)

文化とは、「任意の範囲(地域)に定着した生活様式だ。」「生活様式」が肝で、食文化、建築文化などだけでなく、芸術的活動や、教育制度、冠婚葬祭なども網羅する。

これで何となく判ってきたような気がしてきました。

【文化】とは、生活様式であれば、常に未来に向かって進化(変化)していくモノである。と思っています。

例えば、笹川の秋祭りを考えてみると、過去は、

開催日は、諏訪大社の御射山社祭(上社・下社)8月27日に併せて行われていた。

この時期は、出稼ぎに出ている人達が稲刈りのため帰郷される時期と重なり、家族が一同に会して旅の無事と収穫を祝った。(昔は、稲の刈入れが現在より早かったとの事。)

また、盆踊りは、近隣の人達からも礼賛(?)され、笹川のばか祭りと言われ4晩も踊った。

昨今は、職業の変化に伴い、出稼ぎが殆ど無くなり、開催日は、8月27日に近い土曜日に行われことになった。

盆踊りは、10数年前に立ち消えとなった。

昨年、盆踊りが復活し、今年も行われました。

盆踊りの復活は、懐古的な思いとは違って、

例えば、地域の活性化の【ひとつの行事】と言うことかも知れません。

新しい思いと形で復活した【秋祭りの盆踊り】、笹川の新たな文化として、是非、大事に育てて頂ければと思っています。

他にも、沢山の新しい取り組みが行われ励んでおいでの姿を帰郷の折に見せて頂いてきました。

先人の知恵と努力により作り上げられ培われてきた文化、その上に先人に劣らぬ知恵と努力で新しい文化を築いて行かれるよう願うばかりです。

インターネットに【共生の里 笹川】と言う、ホームページも掲載しております。

<http://www.ubique.dynalias.com/~sasakawa/>

次号は2011年1月に発行を予定しております。

(長井清武 記)



創刊号 昭和33年3月~9号 昭和37年5月



(昭和36年12月 石垣クラブ クリスマス・パーティ)